

大原野出土の韓式系土器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



縄文叩きの拡大

ここに紹介する土器は、2006年度に西京区大原野南ノ町の街路建設現場から出土したものです。市内では希有な出土品であるため、注目してみます。

土器を観察する 一見普通の須恵器甕のように見えますが、外面には「^{じょうせきもん}縄席文」といって、板に縄を巻き付けて叩いた際の縄目が残し、その上に沈線がめぐっています(図1・写真1)。

口径12.6cm、器高は約27cm、体部最大径が約32cmの球形で口は短く外反し、端部は下方にわずかにふくらみます。縄席文叩きは左上りに施されています。左手に土器を抱きかかえ、右手で回しながら叩いたためとみられます。沈線は下半から始まり、頸部付近で終了します。5条確認できますが、その下は指ナデが一周し沈線と同じ効果を見せています。底部付近には平行叩きと格子叩きが観察できます。重量がかかる底部は厚手で、よく叩いて成形し、その後に上半部が積み上げられたのでしょう。

内面はナデで調整されていますが、丸い^{くぼ}窪みが横方向に並びます。これは外面の縄席文叩きの裏側の当て具が無紋であったことの証しです。また、この個体は表面が灰色に焼かれながらも断面は赤みを帯びています。これも初期須恵器にみられる特徴です。

写真1 大原野で出土した韓式系土器

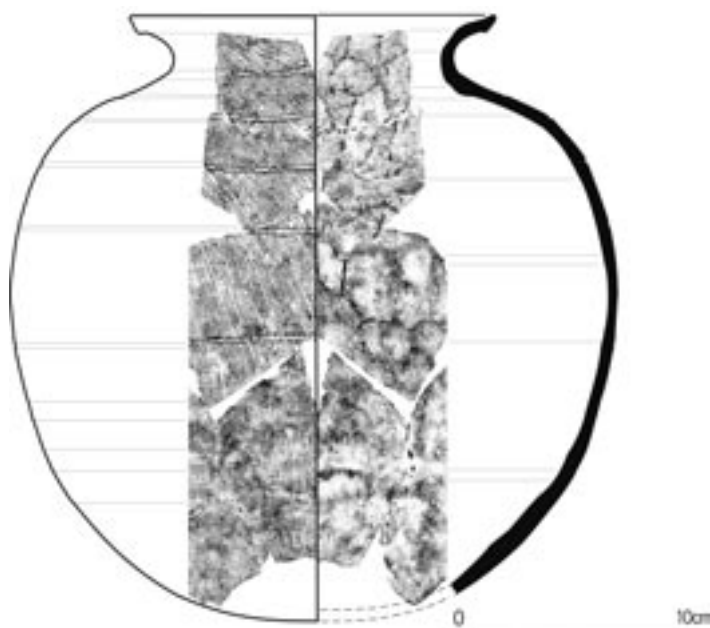


図1 写真1の実測図



写真2 和泉式部町遺跡から出土した韓式系土器

韓式系土器 このような特徴を備えた土器は、「韓式系土器」と総称されています。朝鮮半島南部で製作され、日本列島にも持ち込まれたものと考えられますが、中には、わが国で作られたものもあります。類似する製品は畿内各地の古墳時代中期から後期初めの遺跡で出土しており、朝鮮半島南部の人々が大量に倭国に移り住み、日本の古墳文化の変革に大きな役

割を果たしたことを示す物的証拠でもあります。

京都市域の出土例 1987年に調査された右京区和泉式部町遺跡で、縄蓆文叩きのある甕が出土しています（写真2）。この遺跡では、初期須恵器やL型カマドをもった竪穴住居跡も出土しており、渡来人が定着した最初の遺跡と理解されています。また、山科区の中臣遺跡では土坑墓から、鳥足文叩き

目のある甕が出土しています。これは百済地方からの招来品とされるものです（写真3）。

韓式系土器の背景 北山背では古墳時代中期に入ると、台地上に集落が営まれるようになります。新たな開発技術を持った渡来系の人々が定着したことが想定されてきました。その代表が秦氏です。秦氏は、藤原氏と姻戚関係を保つことで桓武天皇とも結び、奈良にあった都を、長岡京、平安京へ遷す原動力となりました。

桓武天皇の遊獵は、長岡京時代から始まり、平安京に遷都した後もたびたび各地を訪れました。大原野もまた、桓武天皇が頻繁に遊獵に通った場所でもあります。

桓武天皇の生母である高野新笠は、百済王族の血を引く人物です。桓武天皇と古墳時代中・後期から開発が進んだ大原野との間には、渡来人を介在とするつながりがあったとしても不思議ではありません。そうした北山背における渡来人の活動を示す遺物として、この土器に改めて注目しています。

（丸川 義広）



写真3 中臣遺跡の土坑墓副葬品（右上が韓式系土器）

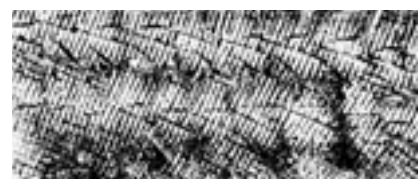


写真3の鳥足文叩きのある甕（上）と拓本（下）